

# 明星大学通信教育部における台湾学生受け入れ事業

## — 高等教育の機会均等、開かれた大学を目指して —

板橋 政裕\*

### 目次

はじめに

#### 1. 台湾学生受け入れ事業

- (1) 明星大学通信教育部と台湾学生
- (2) 大学通信教育需要の背景
- (3) 受け入れ学生の実態

#### 2. 台湾学生受け入れの実施状況

- (1) 台湾特別クラス
- (2) 台湾スクーリング

おわりに

### はじめに

明星大学通信教育部では、開設当初より「高等教育の機会均等」「開かれた大学」という理念を掲げ、日立製作所武蔵工場武蔵女子学園や沖縄育英義塾保育専修学院、各地の教育委員会との委託事業など、大学通学課程への就学が困難な人々に対する教育の機会の提供や、学校教員に対する現職教育が様々な形態で展開されてきた。

本稿では、そうした教育活動の一環として1978（昭和53）年から1987（昭和62）年の10年間、台湾学生に対して実施されていた教育的配慮である「台湾特別クラス」と、当該年度において毎年開講された「台湾スクーリング」に着目することによって、本学通信教育部が国内のみならず国外においても、いかに「高等教育の機会均等」、すなわち「開かれた大学」の実現に貢献してきたかを検討するための一助としたいと考える。

#### 1. 台湾学生受け入れ事業

##### (1) 明星大学通信教育部と台湾学生

明星大学通信教育部では、受け入れ事業に本格的に着手する以前から、台湾学生へ学習の機会を提供していた。「通信教育部卒業生名簿」を確認してみると、本学通信教育部の最初の卒業生は、開設の翌年である1968（昭和43）年に入学し、1970（昭和45）年度3月に卒業した台湾学生であった<sup>1</sup>。その後も1977（昭和52）年度3月に1名、1978（昭和53）年度3月には13名もの学生が、「台湾特別クラス」や「台湾スクーリング」を開始する以前に入学し、卒業していたということが今回の調査で明らかになった<sup>2</sup>。

---

\* 教育学部 講師

また、当時の明星大学通信教育部部報『めいせい』には、「日華教育会議で、福永安祥先生に会った折に、明星大学を紹介され、入学願いを届け出たのですが、外国在住者の初めての出願である為、教育法令の面や、事実上の困難等が、たくさんある所、甲斐則雄主任を始め、入学係りの小川哲夫先生、博士コースにいられた李園會さんの御尽力により、学苑長児玉九十先生が、特に『戦後の教育事情の処理に』と許可して下さい、台湾の多くの人々に、勉強の橋を架けて下さいました事は、私達の一大幸せであります。」<sup>3</sup>と1977（昭和52）年度に卒業した学生からの謝辞も掲載されている。このように、通信教育部における台湾学生の受け入れにあたっては、明星学苑の創立者である児玉九十（1888-1989）の教育機関として、台湾の「戦後の教育事情の処理」に積極的に対応していかなければいけないという考えがあったことがうかがえるのである。

## (2) 大学通信教育需要の背景

当時の台湾において、大学通信教育の需要が高まった要因としては、学歴社会の到来によって人々が4年制大学の卒業資格を欲するようになったということを指摘することができるであろう。一般の社会人においても、学歴が職位に強い影響を及ぼすようになったことにより、高等教育の必要性が必然的に高まったのである<sup>4</sup>。しかし、当時の台湾ではそうした社会人の要請に応える教育機関の整備が充分ではなかった。そこで、日本統治下で教育を受け、日本語を使用することができる社会人に対しては、大学卒業資格を取得するための教育機関として、日本の大学通信教育が重要な役割を果たすことになったのである。

学歴社会の到来は、教員養成制度にも影響を与えた。制度改革によって、教員養成の大学化が推進されていったのである。こうした教員養成制度の改革によって、2年制の養成課程出身の教育関係者にとっても、大学卒業資格を取得する必要が生じてきていたのである<sup>5</sup>。

## (3) 受け入れ学生の実態

明星大学通信教育部に在籍していた台湾学生の実態を明らかにするために、ここではその職業に着目して論を進めていくことにしたい。当時の台湾学生の職業を確認するための資料としては、職業及び職場情報が掲載されている「卒業生名簿」を用いることとする。

調査の結果、確認することのできた台湾学生の卒業者は計41名であった<sup>6</sup>。その中で、校長、小学校教員、中学校教員等の教育関係者が占める割合は31名である<sup>7</sup>。前節でも述べたように、この結果をみても、当時の台湾の教育関係者が職務上の理由から大学卒業資格が必要になり、本学通信教育部に入学していたということが言えるのではないであろうか。

また、受け入れ事業を本格的に開始し初めて迎えた1978（昭和53）年の夏期スクーリング開講式では、学長の児玉三夫（1915-1996）が台湾学生に対して、「一昨日、台湾から十四名のスクーリングに参加される先生方がお見えになっていらっしゃいます。なかなか出国のむづかしい時に、あえて勇気をもってご参加いただいたということは、これまた大変ありがたいことであり、またそのお気持ちに接し、深甚な敬意を表します。」<sup>8</sup>と発言している。ここで、台湾からのスクーリング受講生に対し、「先生方」という表現を用いていることから、教育関係者が多く含まれていたということをうかがい知ることができるであろう<sup>9</sup>。

このように、既に台湾学生の受け入れを行い、卒業生も輩出していた本学通信教育部だが、夏期スクーリングにおける「台湾特別クラス」の設置や、「台湾スクーリング」の実施等、本格的な受け入れ体制の整備に着手するようになるのは、1977（昭和52）年になってからであった。同年の「通信教育部関係者会合資料」<sup>10</sup>によると「台湾入学者（3年次9名）」とあり、学習方法としては「スクーリング 夏期8単位取得できるように工夫」と台湾学生への学習上の配慮に関する記載がみられ、次年度の夏期スクーリング「台湾特別クラス」の設置に向けて協議されたことが分かっ

た。また、同じく次年度から開講されることとなる台湾スクーリングについても、「出張講義 毎年2月に2週間の予定で計画(教育学専門科目)」、講義内容は「教員免許状に関係なく、卒業希望」とされ、受講要件としては「日本語ができる」者を対象とすることが明記されている<sup>11</sup>。各年の「通信教育部関係者会合資料」によると、台湾学生の入学状況は以下の通りであった。

1978(昭和53)年:14名(3年次編入学) 1979(昭和54)年:14名(3年次編入学) 1980(昭和55)年:1名(1年次入学)、12名(3年次編入学) 1981(昭和56)年:3名(1年次入学)、6名(3年次入学) 1982(昭和57)年:4月生4名(1年次入学)、3名(3年次編入学)、10月生6名(1年次入学) 1983(昭和58)年:3名(1年次入学)、4名(3年次編入学) 1984(昭和59)年:1名(1年次入学)、5名(3年次編入学) 1985(昭和60)年:3名(3年次編入学) 1986(昭和61)年:1名(1年次入学)、10名(3年次編入学) 1987(昭和62)年:1名(3年次編入学)<sup>12</sup>

## 2. 台湾学生受け入れの実施状況

明星大学通信教育部では、台湾学生の組織的な受け入れ体制の整備について、1977(昭和52)年に協議され、翌1978(昭和53)年から1987(昭和62)年まで「台湾特別クラス」と「台湾スクーリング」が開講されていた。ここでは、台湾学生の受け入れ事業の詳細を明らかにするため、『スクーリング参加者名簿』や「通信教育部関係者会合資料」をもとに、その実施状況について確認していくことにしたい。

### (1) 台湾特別クラス

既述したように、台湾学生の多くは教育関係者であり、その学歴は日本における短期大学卒業、専門学校卒業に相当するものであった。したがって、通信教育部には3年次に編入学し、卒業するためには2年間で62単位以上の単位を取得する必要がある。また、通常の単位の他に、実際に大学に通学してスクーリングを受講することによって得られる「スクーリング単位」の取得も卒業するためには必要である。明星大学通信教育部では、台湾学生に向けた特別措置として、夏期スクーリングにおいて「台湾特別クラス」を開講することによって、通常の単位取得とともに「スクーリング単位」取得の支援を行うことになったのである。こうして、1978(昭和53)年から1987(昭和62)年の間、台湾学生を対象とした「英語」と「教育学演習Ⅱ」の特別クラスが夏期スクーリングにおいて2週間開講されたのであった<sup>13</sup>。当時の『スクーリング参加者名簿』によると、台湾学生の当該時期におけるスクーリング参加者数は以下の通りである。

1978(昭和53)年:14名 1979(昭和54)年:14名 1980(昭和55)年:15名 1981(昭和56)年:12名 1982(昭和57)年:14名 1983(昭和58)年:8名 1984(昭和59)年:8名 1985(昭和60)年:不明<sup>14</sup> 1986(昭和61)年:5名 1987(昭和62)年:5名<sup>15</sup>

### (2) 台湾スクーリング

明星大学通信教育部では、台湾学生に対する特別措置として教員の派遣も行っていた。本来であれば、来日し、明星大学で行われるスクーリングを受講しなければ取得することのできない「スクーリング単位」を現地でも取得できるようにしたのである。このことによって、台湾学生のスクーリング時の日本に滞在する期間は短縮され、学習上の負担は軽減したのであった。台湾スクーリングは、1978(昭和53)年から1987(昭和62)年にかけて、毎年2月に2週間<sup>16</sup>、台中市において開講された。さらに、今回の調査によって、当時台湾にはスクーリングの授業のみならず、

卒業論文の指導や卒業式も行われていたことが明らかとなった。「通信教育部関係者会合資料」には、この台湾スクーリングについて、次のように記録されている。

1978（昭和 53）年度

時 期：2 月 13 ～ 25 日

出張者：児玉三夫学長、福永安祥教授、塚田紘一助教授、甲斐規雄助教授

内 容：大学卒業のための科目

1979（昭和 54）年度

時 期：2 月 3 日～ 17 日

出張者：児玉三夫学長、福永安祥教授、塚田紘一助教授、甲斐規雄助教授

内 容：大学卒業のための科目

1980（昭和 55）年度

時 期：2 月 5 日～ 16 日

出張者：児玉三夫学長、福永安祥教授、塚田紘一助教授、甲斐規雄助教授、小川哲生講師

内 容：大学卒業のための科目

1981（昭和 56）年度

時 期：2 月 5 日～ 16 日

出張者：児玉三夫学長、福永安祥教授、甲斐規雄教授、塚田助紘一教授、小川哲生講師

内 容：大学卒業のための科目

1982（昭和 57）年度

時 期：1 月 26 日～ 2 月 7 日

出張者：児玉三夫学長、福永安祥教授、甲斐規雄教授、塚田紘一助教授、小川哲生講師

内 容：大学卒業のための科目

1983（昭和 58）年度

時 期：2 月 5 日～ 19 日

出張者：甲斐規雄教授、塚田紘一教授、小川哲生助教授

内 容：大学卒業のための科目

1984（昭和 59）年度

時 期：2 月 5 日～ 17 日

出張者：5 名

内 容：大学卒業のための科目

1986（昭和 61）年度

時 期：9 月 12 日～ 17 日

出張者：2 名

時 期：2 月 1 日～ 2 月 15 日

出張者：3 名

内 容：大学卒業のための科目・卒業式及び卒論指導

1987（昭和 62）年度

時 期：9 月 12 日～ 17 日

出張者 2 名

時 期：2 月 1 日～ 15 日

出張者 2 名

内 容：大学卒業のための科目・卒業式及び卒論指導<sup>17</sup>

「台湾スクーリング」において開講されていた科目は、「大学卒業のための科目」とだけ記されている。出張者の当時のスクーリング担当科目から、下記のような科目が開講されていたと考えられる。

兄玉三夫：教育学演習Ⅰ、教育学特殊講義Ⅰ

福永安祥：教育社会学

甲斐規雄：初等教育原理、教育学演習Ⅰ、教育学演習Ⅱ

塚田紘一：児童心理学

小川哲生：初等教育原理、教育学演習Ⅰ<sup>18</sup>

1986（昭和 61）年と 1987（昭和 62）年の資料では、「大学卒業のための科目」に加えて、「卒業式及び卒論指導」という記述も見られた。本学通信教育部の台湾学生に対する組織的な受け入れ事業は、1987（昭和 62）年をもって終了することになるわけであるが、そのことに備えた対応が強く意識されていたのであろう。さらに当該年度の資料では、従来は 2 月にのみ開講されていたスクーリングに加えて 9 月にもスクーリングを開講していたことを確認することができる。こうした背景には在籍している台湾学生に対して、スクーリングを受講する機会をより多く提供することによって、大学卒業という目的の達成を促そうという大学側の配慮がうかがえるであろう。

また、上述したように「通信教育部関係者会合資料」において、「卒業式」の記述があるのは 1986（昭和 61）年と 1987 年（昭和 62）年のみであったが、『めいせい』の誌上には 1978（昭和 53）年度に卒業した台湾学生から「学長先生自から御臨席の下、茲に台湾出張スクーリングを終え、又私に卒業証書を授与して下さいましたありがたさを、しみじみと胸に感じ、辱い気持で一ぱいでございます。」<sup>19</sup>との言葉が寄せられており、台湾スクーリングの開始当初から授業に加えて卒業式もあわせて挙行されていたことが明らかとなった。

本節で扱った台湾スクーリングは、台湾の学生に対して学習の機会を積極的に提供する試みであり、明星大学通信教育部の掲げる「教育の機会均等」や「開かれた大学」という理念を象徴する取り組みでもあったのである<sup>20</sup>。

## おわりに

本稿では、明星大学通信教育部における台湾学生の受け入れ事業の詳細について、当時の資料をふまえて検証を試みた。研究対象時期の台湾の社会人、特に教育関係者においては、教員養成制度の改革が推進される最中で、4年制大学の卒業資格、即ち学士号の取得は喫緊の要事となっていたのだろう。当時の台湾の社会人は、使用言語やスクーリング受講の際の移動距離・時間といった事情から、日本の大学通信教育課程を進学先として選択したのであった。

明星大学通信教育部の台湾特別クラス及び台湾スクーリングは、日本語話者の高齢化に伴う学生数の減少や、日本語で授業を行うことが困難になったことを理由として、1987（昭和62）年を以て終了となった<sup>21</sup>。通信教育部では、10年という短い期間ではあったが、台湾における高等教育の需要の高まりに対応していくために、台湾特別クラスや台湾スクーリングを実施することによって、台湾の人々に教育を受ける機会を提供したのであった。すなわち本学通信教育部は、国内のみならず海外に向かっても「開かれた大学」として、「高等教育の機会均等」を実現させるという重要な役割を担っていたということである。

## 注

- 1 台湾特別クラスの実施初年度である1978（昭和53年）夏期スクーリングでは、教授者代表の飯田晁三が台湾学生に向けて次のような言葉を贈っている。「卒業名簿にごぞいますように第一回の卒業生は台湾の方でございます。また現在、教育学科の博士課程でも李さんが研究されております」明星大学通信教育部『めいせい』1978年 第12巻6号、13頁。
- 2 「明星大学通信教育部卒業生名簿」は、スクーリング受講生向けに発行されていた『スクーリング参加者名簿』に所収されている。『スクーリング参加者名簿』は1972（昭和47）年から1984（昭和59）年まで刊行され、卒業生の情報は1977（昭和52）年から1983（昭和58）年までの名簿に掲載されている。明星大学通信教育部『スクーリング参加者名簿』1983年。
- 3 明星大学通信教育部『めいせい』1979年 第13巻第3号、28頁。
- 4 台中師範学校の卒業生で台湾大学の教授も務めた何瑞藤は、当時の台湾における教育事情について次のように評している。「七〇年代には、世界的に第一次石油ショックが起こったけれども、台湾にとっては奇蹟的経済成長の時代であった。国民教育就学率は九九・六％に達し、大学の総数（短大を含む）は、終戦時の三校から一〇一校に増加した（一九八〇年七月現在）。（中略）このような高度経済成長を遂げた台湾社会には、日本のような受験地獄現象も生じ問題になっているが、教育の高度発展を軸に、テクノロジー現代社会へと、はやい歩調で進んでいることだけは否めない事実である。」蓬萊会関西支部編『台湾への架け橋』何瑞藤「終戦から今日までの台湾教育」1981年、12頁。
- 5 実際に、現職の小学校教員であった台湾学生が「第二次大戦後は祖国、中華民国への復帰にともない、新たに中華文化を基礎とし仁慈寛大と親睦平和を目標とする教育を受け、中学、高校そして専科と八年間の教育課程を修了致しました。」と大学入学に至るまでの自身の教育歴について明らかにしている。明星大学通信教育部『めいせい』1981年 第15巻3号、42頁。
- 6 台湾特別クラス、台湾スクーリングを実施する前に卒業した者も含む。教育関係者以外では、公務員や会社経営者等であった。
- 7 前掲「明星大学通信教育部卒業生名簿」明星大学通信教育部『めいせい』1981年 第15巻2号、34-35頁。1984年 第18巻2号、11-22頁。1985年 第19巻2号、8-17頁。1986年 第20巻2号、10-21頁。1987年 第21

巻2号、8-21頁。1988年 第22巻2号、8-21頁。1989年 第23巻2号、8-16頁。1990年 第24号2号、9-20頁。

- 8 明星大学通信教育部『めいせい』1978年 第12巻6号、4頁。
- 9 明星大学通信教育部に台湾の教育関係者が集まるようになった要因の一つとして、一人の人物の存在をあげることができる。その人物とは、早稲田大学に留学していた際に児玉三夫から指導を受け、後に明星大学大学院において博士号を取得し、国立台中教育大学で教授も務めた李園会である。李は、博士論文『日本統治下における台湾初等教育の研究』の序文において、児玉三夫や明星大学との関わりについて、次のように記している。「一九七五年二月中華民国政府の許可を得て、早稲田大学卒業後十三年ぶりに日本への参観旅行の機会に恵まれ、久しぶりに早稲田大学時代の恩師児玉三夫教授に再会することができた。その時もう一度大学院に入って研究を続けたい気持ちを先生に打ちあげたところ、先生は私の希望を受けて下さった。当時先生は早稲田大学大学院の主任教授と明星大学の副学長を兼ねておられ、明星大学の大学院に入学するよう勧めて下さった。一箇月の参観旅行を終えて帰国した翌年（一九七五年）、中華民国行政院国家科学委員会からの留学奨学金が許可されて、一九七六年二月明星大学の大学院に入学できた。明星大学大学院の人文科学研究科教育学専攻には飯田晁三教授をはじめ、山田栄教授、岡田正章教授等の日本教育界の有名な学者がそろっていた。このため明星大学での三年間の研究は以後の私に多大な影響を与えている。殊に飯田教授は曾て中国の北京大学で教授を担当されたことのある中国通の立派な教授であり、私の指導教授でもあったので、授業の外に論文についてもいろいろと御教示賜って下さった。（中略）明星大学の児玉三夫学長が、大学図書館に中国関係及び台湾関係の書庫を設置し、私の研究に必要な一部分の資料を具えていただいた。また飯田教授からは国立教育研究所、国会図書館、東大図書館、東洋文庫等を紹介していただいた。」
- このように、児玉三夫と親交があり、明星大学の教育を高く評価していた李の影響によって、周囲の教育関係者も進学先として、明星大学通信教育部を選択したということは十分考えられるであろう。李園会『日本統治下における台湾初等教育の研究』台湾省立台中師範専科学校 1981年、1-2頁。
- 10 明星大学通信教育部「通信教育部関係者会合資料」1977年。「通信教育部関係者会合資料」は、例年スクーリング開講式にあわせて実施されていた通信教育部関係者会合において、当該年度の事業内容を確認するために用いられたものである。現在、通信教育部には各年度の資料が1部ずつ保管されている。
- 11 同前。
- 12 明星大学通信教育部「通信教育部関係者会合資料」1978-1987年。通信教育部では4月と10月の年に2回、学生の受け入れを行っている。しかし、資料によってはその区分がなされずに情報が掲載されているものも存在していた。また、資料における「年度」の取り扱いについては、スクーリング開講日の次の日から翌年のスクーリング開講日までを1年としていた模様である。
- 13 「台湾特別クラス」の担当教員名についての記述はないが、海江田進が第12回夏期スクーリング開講式において、「私は英語を教えている平凡な教師ですが、この夏は、台湾の方のクラスを受け持ち指導しました。私の話が有益であったかどうかは別として、遠くから来た台湾の方々の話を聞くだけでも非常にためになりました。」と台湾学生について言及している。このことから、当初の「英語」担当は海江田進であったことが分かった。明星大学通信教育部『めいせい』1978年 第12巻7号、13頁。
- 14 1985（昭和60）年については、現時点では資料の存在を確認することができなかった。
- 15 前掲『スクーリング参加者名簿』1978-1987年（1985年を除く）。
- 16 1986、1987年は計21日間開講されている。
- 17 前掲「通信教育部関係者会合資料」1978-1987年。
- 18 出張者の担当していた科目については、当該時期の「スクーリング講義要綱」によって確認した。前掲『めいせい』

1978 年 第 12 卷 3 号、21-36 頁。第 12 卷 4 号、30-35 頁。1979 年 第 13 卷 3 号、15-27 頁。第 13 卷 4 号 5-14 頁。1980 年 第 14 卷 4 号、63-83 頁。1981 年 第 15 卷 4 号、23-44 頁。1982 年 第 16 卷 4 号、2-25 頁。1983 年 第 17 卷 4 号、2-27 頁。1984 年 第 18 卷 4 号、3-27 頁。1985 年 第 19 卷 4 号、3-26 頁。1986 年 第 20 卷 4 号、3-25 頁。1987 年 第 21 卷 4 号、3-24 頁。

- 19 前掲『めいせい』1979 年 第 13 卷 第 3 号、28 頁。台湾での卒業式に関しては、1981（昭和 56）年に発行された『めいせい』においても「もう一つの卒業式」として、1980（昭和 55）年度に台中市で挙行された卒業式の模様が掲載されている。前掲『めいせい』1981 年 第 15 卷 第 2 号、30-31 頁。
- 20 学長である児玉三夫が台湾スクーリングの出張者となり、実際に授業を行ったのには自身の課題意識も関係しているであろう。「成人に対する教育の機会均等を」と題した学長あいさつでは、「義務教育をはじめとして、青少年のための教育の機会均等は、いずれの国においてもだんだんと充実しております。けれどもその反面、成人に対する教育の機会均等ということが不足しているのではないか、今後、成人の教育問題は非常に大きな課題ではないかということが強く言われました。そのためのカリキュラムをどうするか、そのための国際協力をどうするか、というようなことが真剣に検討されました。」（1980（昭和 55）年 夏期スクーリング開講式）と、成人における教育の機会均等について論及しているのである。明星大学通信教育部『めいせい』1980 年 第 14 卷 6 号、5-6 頁。
- 21 受け入れ事業を開始した 1978（昭和 53）年に入学した学生でさえ「言葉は使わなければ流暢に使えなくなり、特に外国語の場合は忘れてしまうこともあります。私は、三十八年間日本語を使う機会がありませんでしたので、編入学当初は、文章を読むには困らなかったのですが、会話になりますとなかなか上手に思うようにあやつれませんでした。」という感想を述べている。スクーリングを実施するにあたって、台湾学生の日本語能力が徐々に課題となっていったのである。前掲『めいせい』第 15 卷 第 3 号、40 頁。

#### 付記

本稿は歴史的研究を目的としているため、児玉九十先生をはじめとする各氏への敬称の使用を省略させていただいた。読者や関係者のご了解をお願いしたい。